

れ、宛然支那佛教史論文集の觀がある。かくてこそ幾多の研究者の獨り獨りの努力も報いられたと云つても宜からう。唯將來の希望についていへば教理・教團に關する諸事象相互の脈絡を把握しその綜合的發展を考察する上に本書は猶未だしき點がないであらうか、一章毎に教理や僧傳や寺院經濟や信仰や、様々の事象が互ひに表はれ來り、却つてその時代の佛教全體としての動きがより具體的に明確につかめえないうらみがある。いはば餘りに教科書的である。さばあれ本書が從來の支那佛教史の概説に比し新しい意義を持ったもので、佛教全般に對し公平な叙述を割いた點で何よりも初學者の好伴侶となりうるであらう。(菊判二七〇頁、法藏館發行、定價金貳圓)(宮川尙志)

鞆頭漂流記の研究

園田 一 著

「鞆頭漂流記」とは、寛永二十一年(一六四四)に、松前貿易に出かけた越前三國の商人が、滿洲の間島地方の海岸に漂着して、奉天から北京に護送され、朝鮮を経て正保三年(一六四六)に歸國した後、その内の二人の者が江戸幕府において漂流の顛末、彼の地における見聞などを述べたのを記録したものであつて、また、鞆頭物語、異國物語、鞆頭漂着物語などの異名もある。

一體、旅行者の見聞録といふものは、官府の記録などの類には記されないさまじい事柄が述べられてあつて、史料として極めて價値のある場合も多いが、同時に、その土地の言語、習俗に通

ぜぬたみに見當ちがひの觀察を下したり、また、旅行者乃至は筆記者の教養の程度の關係から、くだらない叙述に終始する場合もしばしばある。この「鞆頭漂流記」も、漂流者が教養の低い商人、船頭であり、筆記者が海外の事情にうとい幕府の胥吏であり、さらに、何かにはぐかるところあつてか、事實をことさらに歪曲したとみられる箇所も多少あつて、今日われわれから見れば物足らぬ點も多々ある。だが、一面においては、鎖國政策の下にあつた日本人の滿洲・支那見聞録として極めて珍重せらるべきものあるばかりでなく、彼等の漂流の時機が、あたかも、清の世祖順治帝が入關して、北京に奠都した時にあたつてゐたことは、一段と史興を深めるものがある。さういふわけで、江戸時代にも、すでに、新井白石、近藤正齋、天野信景等の學者がこれに注意して居る。この漂流記をはじめ學問的に取り上げたのは、故内藤湖南博士の「日本滿洲交通略説」で、その後は、上田三平氏「滿洲漂流者竹内藤右衛門の墓」、中山久一郎博士「内鮮より觀たる滿洲の歴史」その他の研究が現はれ、また先年、福井、竹内家所藏の「異國物語」が影印刊行されたときに、これに北京の橋川時雄氏が「校讀記」を附し、別に「異國物語考譯」と題する漢譯、考證を、雜誌「正風」に連載された。

これ等の中にあつて、今度の「鞆頭漂流記の研究」の著者園田一龜氏は、さきに「鞆頭漂流記に就ての研究」(滿蒙)一三八―一四一號、又「奉天圖書館叢刊(第二册)」を出し、その後李朝實録が影印出版せられるに及んで、「再び鞆頭漂流記に就て」(滿蒙)一五

四號、又「奉天圖書館叢刊」第五冊を世に問ひ、この漂流記に關しての隠れもない權威であつた。さうして「後記」によれば、著者のその後の研究の外に、故内藤博士がこれが研究を徹底すべく蒐集せられてゐた關係史料の貸與を受けて、これらを綜合して今度の本となつたことである。「韃靼漂流記」に關する研究の一應の大成と云つて宜いであらう。

この書の本論は、章を分つこと五、第一章は「漂流記の解題」であり、つゞく第二―五章は、それぞれ、「韃靼國漂流の顛末」、「燕京生活の一年」、「漂流人の送還」、「漂流人の日本生還」と題された、漂流記の内容の考證である。著者のことばを借りれば、「從來この漂流記の……記述に對する眞偽の判定は明確を缺き、果してどの程度まで信用すべきものか、全然見當がつかず、半信半疑の間に置かれてゐた。これに對して大體の解答を與へ一切の經過を分明ならしめた」ところのものであつて、漂流記の記事をば、支那・朝鮮側の――特に、豐富、かつ詳細なる朝鮮側の――諸史料とを巨細に對比検討したもので、從來未發見の史料も多く擧げられ、また、先人と異なつた見解も含まれてゐる。

附録として、一、石井本韃靼漂流記 二、朝鮮物語(卷三―四) 三、韃靼語・支那語各傳本異同表がある。(一)のものは、漂流記の本文であつて、石井本(帝國國文庫「漂流奇談集」所收のもの)を底本として、これに異本の字句を補つたもの、(二)のものは、この漂流記の内容をとり入れた、右の題の如き、寛延年間出版の讀み本小説である。(三)のものは、漂流記の後半に、澤山の韃靼(補

洲)語と北京語とをのせてゐて、これがかなり正しい發音を傳へてゐることが、かねてから注意せられてゐたことなのであるが、これの一行に正しい字をあてた對照表である。著者の比定は大體正しいと思ふが、一二眼についたものを擧げたい。韃靼語の内、「明日」を「チマハ」といふのは、*Yinaha* を寫したものであらうし、「駱駝」を「トモ」といふのは *femen* を寫したものであらう。また支那語の内、「朝」を「ソウシ」といふのは早起 *tsao chi* を寫したものと思はれる。

以上が本書の大體である。著者の第一著「韃靼漂流記」に就ての研究」以來、今日まですでに十年に近い。この間他の語學者の研究もあつたとは云へ、この漂流記に關する研究をこゝまで進めた著者の多年の勞苦に厚く敬意を表する次第である。(菊判、三二八頁、康徳六年七月、南滿洲鐵道株式會社鐵道總局庶務課發行)〔藤枝是〕

#### バクトリア及び印度に於ける希臘人

W・W・ターン著

Tarn, W. W.: *Greeks in Bactria and*

*India, Cambridge 1938*

バクトリアは、アレキサンダー大帝の東征の結果として、ヘレニズムの文化に光被せらるゝやうになつたが、このバクトリアに於けるヘレニズムの形態は、既に其の地に培養せられ居たりし、